

手のひらのお話

小柳 貴衛  
アニメーション学科

The world in my palm

KOYANAGI Takae  
Department of Animation

## 作品解説

本作品群を制作するきっかけとして、娘の幼少期と一緒に見ていたNHK Eテレ『みいつけた!』がある。番組の1コーナー『おてて絵本』では子どもたちが何も存在しないはずの両手にあたかも「本」があると見立て、思いつくままに物語を語る。子どもたちが発想を広げ思いがけない展開を示すことが楽しく、またそれをアニメーションとしてビジュアライズしている本コーナーは実に興味深かった。元の概念として調べていくと絵本作家の佐藤伸（作家名：サトシン）が提唱した『おてて絵本』があり、佐藤は活動を行う中で同じような概念の遊びで寺内定夫が提唱した『てのひらえほん』に対して言及していた(1)。関連書籍もいくつか見つかり、以後研究対象の一つとしていきたいが今回はあくまでも作品を作るためのきっかけとしてとどまる。

これらは元は「遊び」であるが、発想法としては面白いと感じ、実際に発話して短い物語を組み立てることを試みた。通常発想する「読み手」とそれを聞く「聞き手」の二者が存在するはずだが、今回は声に出すこと、何も見ないでアクシデンタルに創作することに重きを置いている。実際に行くと出鱈目なようで意外とそうでもない面白いシーンや話が思い浮かぶ。普段何かを作る際に数十年培ってきた良くも悪くも「型」があるとたまに感じるが、作品制作の上で根幹になる発想やテーマのバリエーションを増やすのには有効な試みの一つだと考え、また同時に無意識にある「型」や趣向を客観的に形にする手段にもつながるのではないだろうか。

この実験的物語生成プロセスと後述にあるビジュアル制作は下記のような流れとした。

- ・シチュエーションは特定せず、聞き手は存在しない。（あえて言えば“物語”が生成されたのちに客観視した自分が聞き手である）意識的に何かを見ることはせず、あくまでも自らの内面から出てくるイメージで構成を行う。時間はあまりかけず、数十秒からおおよそ2分以内での生成となった。
- ・録音等にて記録し、不要な部分（発音上のノイズやタイミング）を除去、整理を行い文章化する。（ビジュアル作品と共に掲載される文章）
- ・ビジュアライズは通常あるプロセスと同等で、リファレンス収集やラフスケッチを行い、ビジュアルコンセプト決定後、時間をある程度かけて完成まで進める。

上記のプロセスで進行していく中で、今回生成された短い物語と共に描き起こしたコンセプトアートも合わせて作品展開をしていく。コンセプトアートの定義としてJan Urschelは、誰かの頭の中に“言葉”や“考え”として存在していたアイデアを指示書に従って印象的な絵として可視化し、作品制作の工程上、視覚ガイドとして使用されるもの、と述べている(2)。つまり今回の絵と文を合わせた作品群は、潜在的に秘めているかたちになっていないアイデアをまず“言葉”として成り立たせ、その次に絵として可視化させるという流れをとっており、これは作品制作の全体、または一部となり得る。結果、一枚絵のイラストレーション作品の体裁であるのと同時に、想定する映像作品の一部分として、または映像作品のクオリティやルック開発のガイドとしての側面があると著者は考える。

(1) 佐藤伸, “おてて絵本とは”, 絵本作家サトシンHP, <https://www.ne.jp/asahi/satoshin/s/ofktoha.htm>, (参照 2024-10-1).

(2) Jan Urschel, “コンセプトアーティストとは?”, コンセプトアーティストになるために知っておきたいこと, 高木了 編, 東京, 株式会社ポーンデジタル, 2020, p.10.

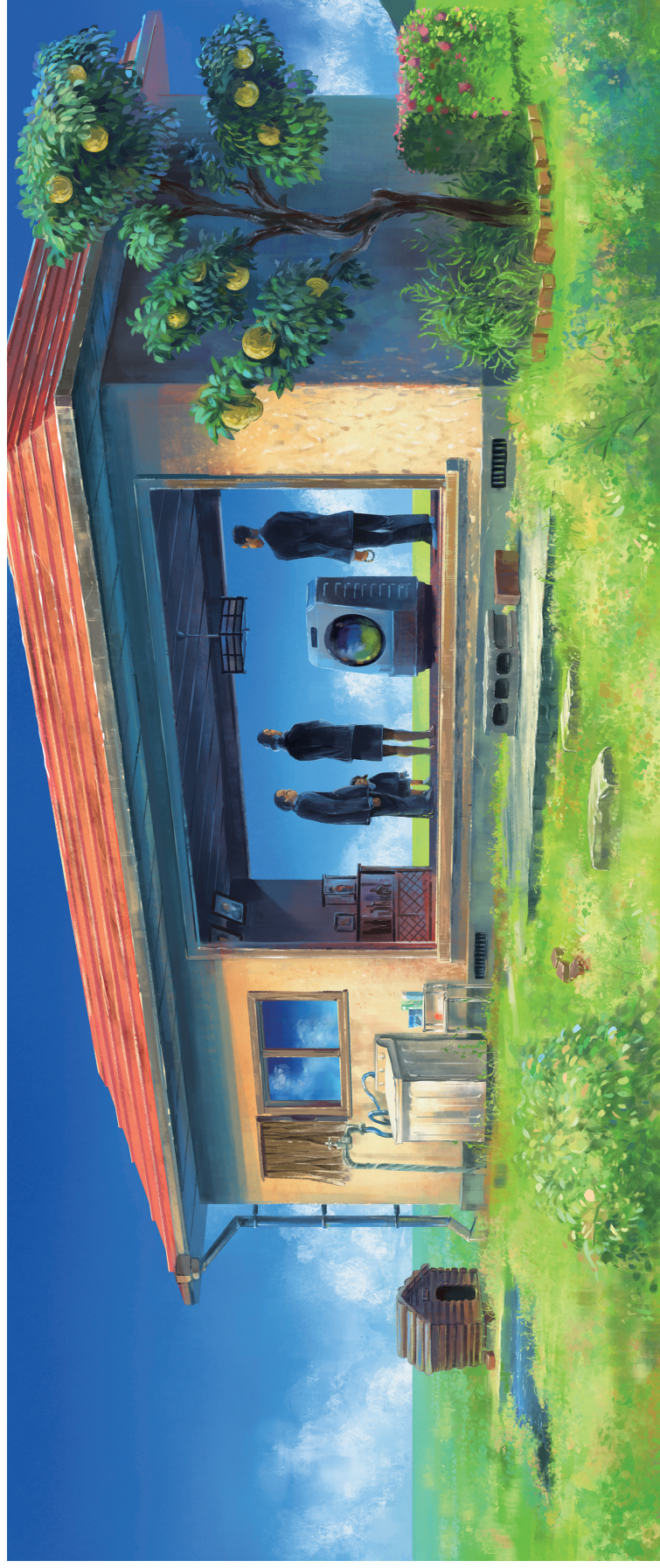


夏の暑い日、巨人は遥か彼方の街を眺めています。

街の集合住宅には少年が住んでおり、暑い夏をダラダラと過ごしていました。巨人は瞬間移動し、少年の元へやってきました。

少年は最初びっくりしましたが、次第になかよくなり、暑い夏を一緒に遊んで過ごしました。





ある夏の日、実家の家の洗濯機が壊れました。その洗濯機はずっと働いていて疲れてしまい、ついに動かなくなってしまいました。洗濯機はこのままずっと取り残されたままかと思いましたが、昔使っていた人たちが最後に来てくれました。洗濯機は嬉しくなりました。





大きな花が空中にあり、たくさんの恵みの雨を降らしました。旅人は翼竜に乗り、恵みの花を目指しました。途中、悪天候が重なり、ほとんどのその花を目指す旅人は命を落とします。少年を乗せた小さな翼竜は苦難の中、大きな卵を見つけた。その中には悪天候を除去する機械が入っており、少年はそれに守られて悪天候を乗り越え花に到達することができました。





大きな街の小学校。授業が終わり、急いで帰る小学生がいました。電車にゴトゴト張り巡らされた街を気をつけながらスイスイ駆け抜け、家にある今日のおやつを想像しながら急いで帰りました。





昔あるところに大きな森がありました。そこには小さな魚が暮らしていました。魚はいつもどこからかやってくる“メカ”に食べられないかとヒヤヒヤしていました。ある日目が覚めると目の前にその“メカ”がいました。これはもうだめだ、と魚は覚悟を決めました。メカは「ぼくはいきものじゃないから食べないよ」と一言言いました。その後二人は仲良く暮らしました。